

パトナムのモデル理論的議論と水槽の中の脳

津留 竜馬

ヒラリー・パトナムは、实在論を攻撃してモデル理論的議論と呼ばれる議論を展開しており、また、パトナムのこの議論に対しては、様々な批判が提起されてもいる。この論文では、パトナムのモデル理論的議論およびこれに対する批判を検討し、これらの批判からパトナムの議論を擁護するよう試みたい。

1 形而上学的实在論に対するモデル理論的議論

パトナムの形而上学的实在論に対するモデル理論的議論と呼ばれるものには、いくつかのヴァリエーションがあると考えられる。具体的には、1978年の論文「实在論と理性」での議論、1980年の論文「モデルと实在」での議論、1981年の著作『理性・真理・歴史』の中に含まれる議論、などである。一つ目の議論の特徴は、形而上学的实在論という立場が（必要とされる）あらゆる条件を満たすような理想的理論にも誤りの可能性を認める立場として定式化され、その上でそのような立場が不整合なものであることが示される点にある。これに対して後者二つの議論では、形而上学的实在論の立場のそのような特徴づけはそれほど強調されていない。むしろこちらでは、形而上学的实在論の立場では我々の言語の指示関係を特定できず、指示の不確定性が帰結することに焦点が当てられている。その議論の際に、レーヴェンハイムスコーレムの定理に訴える点が二つ目の

議論の特徴であり、入れ替えの議論に訴えるのが三つ目の議論である。では、三つの議論の概略を簡単に紹介しておくことにする。

講演「实在論と理性」での、理想的理論の誤りの可能性を認める形而上学的实在論が不整合であることを示す議論は、以下のようなものである。いま世界についての理想的理論が完成したとして、その理論を T としよう（ここでは、世界の濃度が無限であることと、その理論が一階の言語で書かれていることが仮定されている）。理論 T は理想的理論であるため無矛盾であり、よってモデルを持つ、しかも任意の無限濃度のモデルを持つ。そのため、そのモデルたちの中から、世界と同じ濃度のモデル M を取ることができる。仮定により、モデル M と世界との間に一対一対応を取ることができて、その対応を通じて理論 T は、世界について真になってしまう。よって、（必要とされる）あらゆる制約条件を満たすような理想的理論がそれでも誤りの可能性を残しているとする、形而上学的实在論の主張は維持できないものとなる¹⁾。これに対して、理論 T を強引に世界について真としてしまうような、 T のいまの解釈（モデル）は、「意図されたモデル」ではないのだ、として応じようとするならば、その者は次の「モデルと实在」での議論に出会うことになる。

論文「モデルと实在」における議論は、レーヴェンハイムスコーレムの定理を用いて、次のことを示すものである。すなわち、实在論の立場は対象を把握する超自然的な能力にでも訴えない限り、理論 T の意図されたモデルを特定することはできない、という主張である。パトナムに拠れば、超自然的な能力の他に意図されたモデルを特定するために使えるのは、理論的制約条件と操作的制約条件だけである（これらの条件が具体的にどのようなものであるかについては立ち入らないことにするが、パトナムは、理論的制約条件プラス操作的制約条件は言語の使用の全体だと述べている (Putnam [1980] p. 4)）。理論 T がこれらの理論的制約条件と操作的制約条件をともに満たしたとする。しかしこの T に対しても、レーヴェンハイムスコーレムの定理が適用できて、理論 T はあらゆる無限濃度のモデルを持つことになり、そのうちのどれか一つを意図されたモデルとして特定することはできない。こうして、实在論者は神秘的な能力に訴えることなしには意図されたモデルを特定できないのだと、結論づけられる。

『理性・真理・歴史』の中に含まれる議論は、その結論に関して、上の「モデルと実在」での議論と変わるところはない。異なるのは、結論に至るために使用される道具立てである。ここで使われるのは、「入れ替えの議論」と呼ばれるものである。ここでその議論を簡略化したものを提示しておく (Hale & Wright [1997] p. 448).

通常の一階述語論理の言語に対する充足の定義を挙げておく必要がある (I は領域 D 上の解釈で、「1」は真理値「真」を意味している)。

$$\begin{aligned} I(R(t_1 \cdots t_n)) = 1 & \Leftrightarrow \langle I(t_1) \cdots I(t_n) \rangle \in I(R) \\ I(\neg \psi) = 1 & \Leftrightarrow I(\psi) \neq 1 \\ I(\chi \wedge \psi) = 1 & \Leftrightarrow I(\chi) = I(\psi) = 1 \\ I(\exists x \psi) = 1 & \Leftrightarrow x \text{ に対するアサインメントだけが異なるような解} \\ & \text{釈 } J \text{ があって, } J(\psi) = 1 \end{aligned}$$

これに対して、次の定理が成り立つ。

定理：I を任意の解釈，P を任意の D 上の入れ替え関数（D から D への全単射）だとする。与えられた I と P から、以下のようにして新しい解釈 I* をつくる。

任意の名辞 t について， $I^*(t) = P(I(t))$ 。任意の述語 R について， $I^*(R) = \{ \langle P(d_1) \cdots P(d_n) \rangle \mid \langle d_1 \cdots d_n \rangle \in I(R) \}$ 。

そのとき、任意の論理式 ϕ について， $I(\phi) = 1 \Leftrightarrow I^*(\phi) = 1$ 。

証明：論理式 ϕ の構成についての帰納法で証明。 ϕ が原子式のとときと存在量化式のとときだけ見ておく。 ϕ が原子式のととき。

充足の定義より， $I^*(R(t_1 \cdots t_n)) = 1 \Leftrightarrow \langle I^*(t_1) \cdots I^*(t_n) \rangle \in I^*(R)$ 。

$I^*(t)$ の性質により， $\Leftrightarrow \langle P(I(t_1)) \cdots P(I(t_n)) \rangle \in I^*(R)$ 。

$I^*(R)$ の性質により， $\Leftrightarrow \langle I(t_1) \cdots I(t_n) \rangle \in I(R)$ 。

充足の定義より， $\Leftrightarrow I(R(t_1 \cdots t_n)) = 1$ 。

ϕ が存在量化式のととき。

$I(\exists x \psi) = 1$ と仮定する．よって， x に対するアサインメントだけが I と異なるような解釈 J があって， $J(\psi) = 1$ ． J^* を， x に対して $P(J(x))$ を割り当てる点だけが I^* と異なるような解釈とすると，帰納法の仮定が使えて， $J^*(\psi) = 1$ ．

ゆえに， $I^*(\exists x \psi) = 1$ ．明らかに逆も成り立つ．QED.

こうして，文の真理値を変動させることなしに，語の指示対象や述語の外延を入れ替えられることが示されたこととなる²⁾．要するに，ここでの解釈 I と I^* のうちいずれかを，意図されたモデルであるとして取り出すことはできない．以上が，パトナムのモデル理論的議論の概略である．

2 「just more theory」の議論

当然のことなのかもしれないが，实在論を攻撃するパトナムの議論に対しては，数多くの批判が寄せられている．何故，理想的理論が一階の言語で書かれていると仮定されているのか (Pearce & Rantala [1982] p. 43)．入れ替えの議論があるのだから，レーヴェンハイムスコーレムの定理に訴えることは不必要ではないか (Hansen [1987] p. 87)．モデル論の適用の仕方に問題はないのか (Hansen [1987] p. 82)，そもそも何故，モデル理論的意味論なのか，等等．しかしこれらの批判はここでは取り上げないことにする．というのは，これらの批判の他に，最も多くの論者が指摘しており，パトナムの議論に決定的な打撃を与えていると考えられているような批判があるからである．それは，パトナムの「just more theory」の議論と呼ばれるものを攻撃するものである．ここでは，この批判だけを取り上げることにして，この批判からパトナムを擁護するべく試みてみたい．

パトナムは，前節で挙げた三つすべての著述において，この「just more theory」の議論を与えている．このことから，この議論がパトナムにとって重要なものであることが窺えるのであるが，その議論の中身は次のような彼自身の言葉に端的に表れている．

指示の「因果」的理論がここで何の助けにもならない（であろう）とい

うことに注意しなくてはならない。というのは、「因果」がどのようにして一義的に指示し得るかということは、形而上学的实在論の描像の上では、「猫」がどのように指示し得るかと同程度に謎であるのだから。(Putnam [1978] p. 126)

問題は、科学を形式化した我々の仮想的言語に「指示の因果的理論」と名付けられた理論を付け加えることは、ただ、さらに理論を付け足すことにしかない、ということにある。(Putnam [1980] p. 18)

上の引用から明らかであるように、パトナムのこの議論は、实在論者が指示を固定するために持ち出してくるようなものは何であれ(典型的には指示の因果説)、元の理論が遭遇したのと同じ困難に晒されるため、役に立たない、ということを示そうとするものである。『理性・真理・歴史』には、さらに具体的な記述がある。实在論者は指示を固定するために次のような定義を持ち出してくるかもしれない、というのである (Putnam [1981] p. 45).

- (1) x が y を指示するのは、 x が y に対して R という関係にあるとき、かつそのときに限る。

ここで R は、意味論的な語彙を用いずに自然科学の語彙で定義されているものとする。これに対してもパトナムは、(1) の事例が真であると知ること何の役にも立たない、と主張する。というのは、入れ替えの議論により、 R が何かまったく違う R^* のようなものを指示しているとしても、その真理値を変わらないようにできるからである。

以上のようなパトナムの「just more theory」の議論に対して、デイビッド・ルイスは、次のような区別を立てることによって、反論を行っている (Lewis [1984] p. 225). すなわち、(いま指示関係に課される制約を C として) 制約 C を表現する文をある解釈が真とすることと、その解釈自体が制約 C に従っていること、との間の区別である。ルイスに拠れば、パトナムの議論は後者が要求されているところを前者への要求と擦り替えるこ

とによって、成り立っているのである。つまり、(1) のような定義を提出した実在論者が狙っていたのは、たんに (1) が意図された解釈で真となることではなく、(1) を真とするようなその解釈自身が (1) が課している制約自体に従うということなのである。

しかしパトナムは、この区別をはっきりと認識している。入れ替えの議論により、(1) が真であると知ることは役に立たないと述べた直後で、彼はこう言っている。

もちろんこのことは、フィールドが意図していることでは全然ない。彼が意図しているのは、(a) 語と事物ないし事物の集合との間には確定した唯一の関係があり、そして (b) この関係は、(1) 自体に真理値を割り当てるときに指示関係として用いられるべき関係である、ということである。しかしこのことは、すでに見てきたように、ただ (1) を述べることだけによって必ずしも表現されるわけではない。そして、どのようにしたらフィールドが言わんとしていることを表現できるようになるのかは、一つのパズルである。(Putnam [1981] p. 46)

このように、パトナムは指摘された区別の存在をよく理解しているのであり、むしろ問題は、後者の、解釈自体が制約 C に従わなくてはならないということを実在論者は表現できないという点にある。何故実在論者はそれを表現できないのであろうか。パトナムのモデル理論的議論についてのサヴェイ論文の中でライトとヘイルは (Hale & Wright [1997] p. 440)、次のように述べている。制約 C を表現するはずの言語 L の文 S が解釈 I によって真となるが、その解釈 I 自体は制約 C に従っていない、というようなことは、制約 C を表現できて言語 L の意味論についても議論できるようなメタ言語 L* のようなものがあれば可能であろうが、パトナムの支持者はこれを認めないだろうと。たしかにパトナムは、上の (1) のような文にだけは確定した指示を認めるという方策や、制約 C を確定的に表現できることが認められているメタ言語 L* といったものを、実在論者に対して許さないのだろう（さもなければ、「just more theory の議論」などしないであろうから）。しかしパトナムのこの考えに対しても、デビッド・

ルイスが批判を加えている (Lewis [1984] p. 225).

ルイスはこの批判を、パトナムのやり方を以下のような対話形式の議論になぞらえることによって、行っている。挑戦者は相手に、有意味な言明は如何にして可能か、と問う。応答者は彼の考える説明を述べようとする。すると挑戦者は、あなたの言葉が有意味でなくては、あなたは答えを述べたことにはならない、だからいまのあなたの言葉が如何にして有意味となるのかを説明してほしい、と迫る。応答者は、論点先取を犯すことなしに、これに答えることは決してできない。必ず挑戦者が勝つのである。しかしながら、応答者は、有意味な言明によって述べることができる、有意味な言明が可能であることの説明を持っているのかもしれないのである。ここからルイスが引き出す教訓はこうである。すなわち、議論に勝つということと正しいということとは、別のことである、と。

多くの論者が、このルイスの批判によってパトナムの議論が論駁されたと、考えているようである (Cleve [1992] p. 349, Hale & Wright [1997] p. 441 など)。パトナムが実在論者に、指示が如何にして確定されるかの説明を求める際に、彼らに確定した指示を前提にすることを許さないのは、まったくおかしい、というのである。もし実在論者がパトナムの求めに応じるべきならば、彼らには確定した指示が前提された言明が許されていなくてはならない。こうして、パトナムの議論は誤りであるとして、退けられてしまう。

しかし、本当にパトナムの議論はおかしいのであろうか。たしかにパトナムは、実在論者に不可能な要求をしているように見える。確定した指示をまったく前提することなしに、確定した指示が如何にして可能かを説明することなど、不可能であろう。だが相手に不可能な要求をしただけで、パトナムの議論が効力を失うわけではない。パトナムの議論を、次のようなものとして、見ることはできないであらうか。すなわち、実在論の立場というものは実は不可能な課題を自ら背負い込むような立場であるのだ、ということを示すような議論であると。もしこのことが示されたならば、この議論は実在論に対する批判として有効に機能するはずである。よって問題は、何故パトナムが彼が標的とする実在論の立場をこのような不可能な課題を背負い込むものと考えているのか、ということであり、さらに

は、何故自らが提唱する内部实在論の立場はこの課題を負わなくてよいのか、ということであろう。

3 水槽の中の脳の議論

パトナムが、彼が標的とする实在論の立場をどのようなものとして考えているのか、および、自分が提唱する内部实在論をどのようなものとして考えているのか、について見るために、彼が实在論批判のために行っているもう一つの議論、いわゆる「水槽の中の脳の議論」に寄り道することにしたい。

「水槽の中の脳の議論」とは、我々すべてが（あるいは、あらゆる感覚を持った生物が）実は水槽の中の脳なのかもしれないという仮説を、自己論駁的な仮説であるとして退けるものである。そのための前提が一つある。それは、水槽の中の脳には「水槽の中の脳」という言葉や思考によって、本物の水槽の中の脳を指示することはできない、という前提である。水槽の中の脳は、「水槽の中の脳」という語によって何か別のものを、おそらくは水槽の中の脳のイメージや、電子工学的インパルス（脳はコンピュータに接続されているのだ）といった何かを指示してしまうのである（それを「水槽の中の脳*」と呼ぶことにしよう）。以上は、指示の因果説、またはそれに限られない何らかの外在主義的な指示についての捉え方からの帰結でもある。この前提により、次のような議論が与えられる。我々は、水槽の中の脳であるかそうでないかの、いずれかである。もし我々が水槽の中の脳ではなかったとき、我々の「我々は水槽の中の脳である」という言明は偽である。またもし、我々が水槽の中の脳であったとすれば、我々の「我々は水槽の中の脳である」という言明は偽である（我々は水槽の中の脳なのであって、水槽の中の脳*などではないので）。よって、「我々は水槽の中の脳である」という言明は必然的に偽である。こうして、我々は水槽の中の脳ではないのだと、結論づけられるわけである。

この「水槽の中の脳の議論」についても、批判が寄せられている (McIntyre [1984], Bruekner [1986])。この批判は様々な形で提起されているものの、その内容はまったく同一のものであるように思われる。それは

すなわち、我々が水槽の中の脳であったときの言明と、水槽の中の脳ではなかったときのその言明とでは、表現されている命題が異なるのであり（つまり我々は、日本語を話していたり、水槽の中—日本語を話していたりするのであって）、結局いずれの言語を話しているのかがあらかじめわかっていなくては、上のような議論はできないのではないのか、というものである。例えば上の議論では、「我々は水槽の中の脳である」は偽であるという結果から、引用符を解除して、我々は水槽の中の脳ではない、という結論へと至っていた。だから、引用符の中の言語が何語かわからないのに引用符を解除できるのか、と批判することもできよう。あるいは、ライトの言うように (Wright [1994] p. 225), どの言語を話しているのかがわからなくとも同音翻訳に拠る引用符解除は常に許されるのだとして、別の角度で問題を提起することもできよう。この場合、水槽の中の脳も上の我々と同様の議論を与えることができ、自分達は水槽の中の脳ではないという結論に至ることができる（もちろんこの場合、彼らが得る結論は、自分達は水槽の中の脳*ではないというものなのであるが）。よって、我々が上のような議論によって我々は水槽の中の脳でないという結論を得たときも、我々が得た結論が、本当の「我々は水槽の中の脳ではない」なのか「我々は水槽の中の脳*ではない」なのかは、相変わらずわかっていないはずなのである³⁾。

私自身は以上のような批判に説得力を感じてしまうのであるが、パトナムの側からのこれに対する応答がある。Tymoczko という哲学者は、上の批判からパトナムを擁護するという作業を、「パトナムの謎の言葉」を解明しながら行っている (Tymoczko [1989])。ここで「パトナムの謎の言葉」とは、次のようなものである。パトナムが水槽の中の脳の議論を与える直前には、この議論が浮かんだのはレーヴェンハイム—スコレームの定理について考えていたときだった、という記述がある (Putnam [1981] p. 7)。一体、水槽の中の脳の議論とレーヴェンハイム—スコレームの定理の間にどのような関係があるというのだろうか。この疑問が、ここで「パトナムの謎の言葉」と呼ばれるものである。では、Tymoczko の議論を見てみよう。

この議論は、スコレームのパラドクスは本当のパラドクスではないと示

す議論と水槽の中の脳の議論との間に、アナロジーを打ち立てることによって行われている。周知のように、ZF がモデルを持つことを仮定するならば、レーヴェンハイム・スコームの定理やらモストウスキー同型定理やらを用いて、ZF の可算推移モデルの存在が示される。このモデルを $\langle M, \epsilon \rangle$ としよう。M の要素はすべて可算であるのだから、 $[P(\omega)]_M$ もまた可算であるはず。にもかかわらず（これは ZF のモデルであるので）、 $P(\omega)$ は非可算である」は $\langle M, \epsilon \rangle$ において真となっている。この事態がいわゆるスコームのパラドクスと呼ばれるものであり、その解決はこうである。まず、 $[P(\omega)]_M$ はやはり可算であることが確認される。その上で、 $\langle M, \epsilon \rangle$ で「 $P(\omega)$ は非可算である」が真になってしまうのは、単に M の中に必要な一対一の関数が存在しないためなのだと、説明されるのである。よって、アナロジーはこうである。1. 可算モデルで「 $P(\omega)$ は非可算である」が真になってしまうという事態に対応して、水槽の中の脳も「我々は水槽の中の脳ではない」という証明を得てしまうという事態がある。2. 可算モデルでの $P(\omega)$ の指示対象は本当の $P(\omega)$ ではないのだし、水槽の中の脳が用いる「水槽の中の脳」という語も本物の水槽の中の脳を指示していない。3. いかに可算モデルで「 $P(\omega)$ は非可算である」が真となろうとも、我々はそれが本当は可算であると認識できるのであり、これに対応して、いかに水槽の中の脳たちが「我々は水槽の中の脳ではない」という証明を得ようとも、我々は彼らが実は水槽の中の脳であると認識できるのである。

こうして Tymoczko は、我々が「 $P(\omega)$ は非可算である」との証明を持っているのと同じように、我々は「我々は水槽の中の脳ではない」ということの証明を得ているのだ、と結論づける。さらにこう付け加えられている。もしこの回答に満足しない者がいるならば、その者は、 $P(\omega)$ が本当に非可算なのかどうかはわからない（本当は可算なのであるが、たんにこの世界に必要な一対一対応が存在しないだけかもしれない）と論じなくてはならないだろう、と。

以上のようなアナロジーが、どの程度妥当なものかはわからない⁴⁾。しかし、Tymoczko が「水槽の中の脳の議論」に対する批判からパトナムを擁護するために言っていることは、（アナロジーに訴えようと、そうでな

かろうと) はっきりしているのである。それはすなわち、「水槽の中の脳一世界」は我々の世界に相対的にのみ可能なのであり(我々の世界を出発点にして、我々の世界とは然々の点が異なるなどとして定義されたものに過ぎないのであり)、そのような「水槽の中の脳一世界」がもしかしたら我々の世界なのかもしれないと思い悩むのは、まったくばかげている、ということである (Tymoczko [1989] p. 290)。

私はこの論争には決着がついてないと考えている。ただここで指摘しておきたいのは(詳しい議論は次節に譲るとしても)、「水槽の中の脳の議論」に対する批判(我々は水槽の中の脳かもしれない)は形而上学的实在論の立場から成されていて、「水槽の中の脳の議論」およびその擁護は(実は)パトナムの内部实在論の立場から成されていた、ということである。そしてこのことが、前節からの宿題であった、何故パトナムは彼が標的とする形而上学的实在論を(先に見たような)不可能な課題を背負い込む立場であると考えているのか、という問題に対する解答を与えてくれるはずなのである。

4 形而上学的实在論と内部实在論

2節で見たように、パトナムは彼が標的とする实在論の立場に、確定した指示をまったく前提することなしに確定した指示は如何にして可能かを説明するという、不可能な課題を負わせていた。何故パトナムは、それが实在論者が負うべき課題であると考えたのであろうか。この節では、前節での「水槽の中の脳の議論」を参考にしながら、この問題について考えてみたい。

私は前節で、「水槽の中の脳の議論」(我々は水槽の中の脳ではないと示す議論)はパトナムの内部实在論の立場から成されており、それに対する批判(我々が水槽の中の脳である可能性は残ると示す議論)は形而上学的实在論の立場から行われている、と述べた。まずこの点を、これまでの議論を振り返りながら、確認しておく。

まず、そもそも形而上学的实在論の立場が「我々はラディカルに世界を捉え損なっているかもしれない(我々は水槽の中の脳なのかもしれない)と考える立場」として規定されていた (Putnam [1978] p. 125), という点を思い出さなくてはならない. だから、形而上学的实在論の立場から「我々は水槽の中の脳なのかもしれない」という主張が出てくるのは当然のことである. また、水槽の中の脳の議論の擁護を行った Tymoczko 自身も、自分の議論にこれでも反対する者(我々は水槽の中の脳なのかもしれないし、 $P(\omega)$ は実は可算かもしれないと考える者) は、パトナムの言う形而上学的实在論者に他ならない、と述べている (Tymoczko [1989] p. 291). パトナムに拠れば、形而上学的实在論者には「意図されたモデル」を指示の魔術説に陥ることなしに特定することはできないのだから ($P(\omega)$ を可算集合で解釈してしまうようなモデルを排除することはできないのだから), そのように考える者が形而上学的实在論者である可能性は極めて高い. 要するに、形而上学的实在論の立場はパトナムによって、一種の懐疑論的な立場として想定されているのである (注 (4) を参照).

次は、「水槽の中の脳の議論」およびその擁護が内部实在論の立場から行われていた、という点である. パトナムははっきりと、「水槽の中の脳の議論」の目的の一つに、形而上学的实在論の立場と内部实在論の立場との相違を明確化するというものがある、と書いている (Putnam [1981] p. 49). その個所に続いて、内部实在論は「水槽の中の脳」仮説を退けるが、他方、形而上学的实在論にはそれは難しいだろう、と議論が進められている. したがって、内部实在論の立場が「水槽の中の脳の議論」を肯定するようなものとして想定されている、ということは明らかである. ところが上で見たように、形而上学的实在論者は水槽の中の脳の議論に反対である. これに対して内部实在論者は何と応じるのだろうか. パトナムは内部实在論を、世界はどのような対象から成るのかという問題は理論や言語の内側でのみ意味を持つと考える立場として特徴づけた上で、以下のように述べている.

内在主義の哲学者 [内部实在論者のこと] は「水槽の中の脳」仮説を斥ける. 我々にとって、「水槽の中の脳—世界」は単なる一つの物語、単

に言語によって構成されたものにすぎず、一つの可能世界では全然ない。この物語がある宇宙、ある〈パラレルな実在世界〉において真であるかもしれないという考えは、容易にわかるように、〈神の眼からの観点〉をはじめから前提にしている。というのも、誰の観点からこの物語が語られているかが問題となるからである。(Putnam [1981] p. 50)

上の「神の眼からの観点」を前提にした立場とは、形而上学的实在論のことである。だから上の引用は、内部实在論が自らの立場に基づいて形而上学的实在論を批判しながら、「水槽の中の脳の議論」を擁護している、という個所である。Tymoczkoのパトナムを擁護する議論も、これと同種のものであった、ということに注意しなくてはならない。よって、「水槽の中の脳の議論」は、少なくともこの議論を形而上学的实在論のような立場から擁護する段階においては、内部实在論の立場に立つことが必要不可欠なものである、と結論づけられるだろう。

以上で、「水槽の中の脳の議論」を巡っての、内部实在論と形而上学的实在論の間の対立的な関係がある程度明確になってきたと思われる。私がここで特に指摘したいのは、次のようなことである。パトナムは形而上学的实在論を、「自分たちの理論や言語がラディカルに世界を捉え損なっているかもしれない可能性を、常に認めるような立場」であると捉えている。これに対して内部实在論の立場は、「そのような（自分の言語全体を疑い得るような）観点は不可能である。我々は自分の言語の内側でしかものを考えられない（疑うこともできない）」と考えるものとして特徴づけられている、ということである。

最後にもう一つだけ、パトナムが自らが標的とする实在論をどのようなものとして考えているかについて、はっきりさせておくべき区分がある。基本的にパトナムは、彼が攻撃する形而上学的实在論を、「世界は、我々の思考や言語から独立した諸対象の総体である」とする立場であると規定しているが、その中にも下位区分がある。それをパトナムは、「プラトニズム」と「穏健な实在論」と呼んでいる (Putnam [1980] p. 1)。ここでのプラトニズムとは、我々が対象を直接的に捉える超自然的な力を容認する

ような立場のことであり、穏健な実在論はそれを認めない立場である(『理性・真理・歴史』では、「指示の魔術説」という言葉がプラトニズムを表すために用いられている)。この、指示の魔術説を採る立場＝プラトニズムを、(穏健な実在論に対して)極端な実在論と呼ぶことにしよう。そしてこの区分に関して重要な点は、パトナムの実在論批判の議論はどれも、穏健な実在論に対してのみ効力を持つのであり、極端な実在論にはまったく通用しない(パトナムの議論はそもそも、穏健な実在論にだけ向けられている)、ということである⁹⁾。このことから、パトナムは彼が標的とする穏健な実在論の立場に対してかなり重い要求を課している、ということがわかる。というのは、如何にして指示が確定するのかの説明を求められた際に実在論者が、もしその説明を放棄したり、その説明があからさまに確定した指示を前提にしていたりすれば、それでは指示の魔術説を採るに等しい、とパトナムに罵られてしまうからである(実際にパトナムはそうしている (Putnam [1981] p. 47))。だから実在論者が、パトナムが攻撃対象とする穏健な実在論者であるためには、なんとしてもその要求に応じなくてはならない。

ここでようやく問題に答えることができる。何故パトナムは「確定した指示を前提することなしに指示を説明する」という不可能な課題を実在論者に負わせたのか、という問題に対する私の解答はこうである。パトナムは彼が標的とする「穏健な実在論」の立場を、「極端な実在論」でも「内部実在論」でもないものとして、位置づけているからだ、と。穏健な実在論者は、極端な実在論者ではないので、指示を説明せよという要求に正気という言葉で応じなくてはならない。また穏健な実在論者は、内部実在論者ではないので、指示を説明する際に用いる言語についても「ラディカルに世界を捉え損なっている可能性」を認めなくてはならない。「そのようなことをしては無限後退に陥るだけ、結局は自分の言語の内部で思考するしかないのだから、地の言語は確定した指示を持っているのだ」というような内部実在論的(そして反一懷疑論的)な考えは、穏健な実在論には許されていないのである。

5 結 語

一応結論のようなものを書くならば、それは次のようになるだろう。

1. パトナムの实在論に対するモデル理論的議論は、その効果を「just more theory の議論」に決定的に依存している。2. 「just more theory の議論」を込みにしたモデル理論的議論は、パトナムが狙いを定めた（極めて限定された）实在論に対しては、有効である。（パトナムが攻撃した实在論に当てはまらない、様々な实在論の形態があり得る、というのはまた別の問題である。）つまり、实在論という立場を「ラディカルに世界を捉え損なっている可能性を常に認める立場」として定式化し、かつ、指示の説明に用いられる言語についてもこうした懐疑を貫徹するならば、实在論者には指示の不確定性という結論を避けることはできない。こうして、パトナムのモデル理論的議論を擁護することが一応できたこととなる。しかし私は、实在論に対するモデル理論的議論は擁護しても、問題の解決策としてパトナムが提唱する内部实在論には疑問を感じている。以下、この点を簡単に説明して終わることにしたい。

パトナムは問題の解決策として内部实在論を提唱しているわけだが、形而上学的实在論が指示の不確定性を被るのに対して、内部实在論がそれを被らないのは何故であろうか。その理由は、内部实在論は「出来合いの世界 (ready-made world)」の存在を認めないからである、と説明される (Hale & Wright [1997] p. 446)。この点で内部实在論は、我々から独立した世界があらかじめ存在していると考える形而上学的实在論と大きく異なっており、そのため、形而上学的实在論者が魔術的な結びつきや因果的連関やらを持ち出して埋めようとするギャップが、内部实在論にははじめから存在しない、というのである。確かにそうなのかもしれない。しかし、「出来合いの世界」を認めず「心と世界が協同して、心と世界をつくりあげる」(Putnam [1981] p. xi) という内部实在論とは、いったい如何なる立場なのであろうか。この点はまったくはっきりしないように思われる。これに比べると、我々から独立して世界が存在していると考える形而上学的实在論の立場は（間違っているのかもしれないが）、素朴ではるかにわかりやすい。

また、言語哲学上の問題もある。形而上学的实在論においては、言語はモデル理論的意味論を与えられることになる。(パトナムの議論においては、言語に対してどのような意味論を採用するかという問題と、实在論を巡る形而上学的問題とが、密接に絡み合っているのである。) 言語とその解釈(モデル)というこのモデル理論的な観点は、(パトナムの議論が示したように)意図されたモデルを特定できないという不確定性の結果を生じるものの、我々の素朴な言語観(の一つ)を反映した考え方である。これに対して内部实在論は、言語とその解釈という枠組みを使わずに(あるいは、言語とその解釈の間にギャップが生じないような形で)言語の説明を与えなくてはならないはずだが、そのような言語モデルは提出されていない。内部实在論の立場で我々の言語がどのように説明されるのか、この点はまったく定かではない。

このように内部实在論自体も問題のある立場であり、形而上学的实在論から内部实在論へと「転向」すればそれでよい、というものではない。私の考えでは、指示の不確定性(あるいはより広く、意味の不確定性)という問題はそう簡単には逃れることのできないものであり、我々はこの問題としばらくはともに過ごさなくてはならないのである。

注

- 1) ここでは、理論 T を世界について真にすることができる、と言われているが、これはたんに、世界に存在するすべての対象から成っているドメインの上で、ある解釈がつくれてそこにおいて真ということであろう。これに対しては、世界とは諸対象の単なる集まり(ドメイン)ではなく、対象間の関係も定まった「構造化された領域」なのだ、という反論がある(Merrill [1980])。世界をあらかじめ構造化された領域だと考えれば、理論 T を世界で真とするために用いた一対一対応が常にとれるとは限らない、というのである。私はこの批判は重要な問題を提起していると思うが、ここでは取り上げないことにする。パトナムのモデル論的議論としても、以下では、二つ目と三つ目の議論だけを扱うことにしたい。
- 2) 本文中の証明が、「互いに同型なモデルは、elementarily equivalentである」というモデル理論の基本的な定理の証明と同様ののものであると、気づいた人も多いだろう。実際、入れ替え関数 P は二つの解釈(モデル)の間の同型写像である。

パトナムの「入れ替えの議論」がこの基本的定理に拠っているということは、Hallett [1994] p. 70 でも指摘されている。

- 3) Wright [1994] でのライトの立場は、本文で見たようなブルックナーらの批判とは微妙に異なっている。ブルックナーらがパトナムを批判したくなるのはもったものであるが、その批判の定式化の仕方がよくない、というのである。ライトに拠れば、我々は次のように言うべきである。パトナムが示したのは、もし我々が「水槽の中の脳－仮説」について考えることができるならば、そのときその仮説は偽である、という条件付きの結果である。よってこの結論により排除されるのは、「我々が「我々は水槽の中の脳かもしれない」と考えていて、かつ、我々が水槽の中の脳である」という事態だけであって、「我々は水槽の中の脳であるが、我々の誰もそのことを考えていない」という事態は可能なのである。(Wright [1994] p. 239)
- 4) 「パトナムの謎の言葉」を解き明かす、別のアナロジーもある。それは、レーヴェンハイムスコーレムの定理（あるいはパトナムのモデル理論的議論）と、「水槽の中の脳－仮説」（あるいはその他の懐疑論）との間のアナロジーである。（以下はHallett [1994] p. 73に拠る。）我々は実は水槽の中の脳なのかもしれないという懐疑論や、世界は5分前に出来上がったばかりかもしれないとか、いま世界全体の大きさが2倍になったかもしれない、といった多くの懐疑論のポイントは、見た目上は何の変化も感知されない（が、世界の方はラディカルに変化している）ということにある。見た目上何の変化も起きないというのは、真な文が変化しないということである。だから、真な文を変化させることなしに、構造の方をラディカルに変化させ得る、ということを示すレーヴェンハイムスコーレムの定理や、パトナムのモデル理論的議論は、いま挙げたような懐疑論と共通の特徴を持つのである。
- 5) 1節で見たような指示の不確定性を示す議論はどれも、その結論は、實在論は超自然的能力（指示の魔術説）でも仮定しない限り「意図されたモデル」を特定することはできない、というものであった。だから、堂々と指示の魔術説に訴える極端な實在論に対して、パトナムの議論が無効であることは明らかである。また「水槽の中の脳の議論」にしたところで（これが實在論批判の議論だったとしてであるが）、この議論を成立させる前提そのもの（水槽の中の脳は本物の水槽の中の脳を指示することはできない）が既に、極端な實在論に反する仮定である。

文献表

- | | | |
|--------------|------|---|
| Anderson, D | 1993 | “What is the Model Theoretic Argument?”, <i>Journal of Philosophy</i> , 90. |
| Brueckner, A | 1984 | “Putnam’s Model Theoretic Argument Against Metaphysical |

- Realism", *Analysis*, 44.
- Brueckner, A 1986 "Brain in a Vat", *Journal of Philosophy*, 83.
- Cleve, J, V 1992 "Semantic Supervenience and Referential Indeterminacy", *Journal of Philosophy*, 89.
- Hale & Wright 1997 "Putnam's Model Theoretic Argument Against Metaphysical Realism", in *A Companion to the Philosophy of Language*, Hale & Wright (eds.), Blackwell.
- Hallett, M 1994 "Putnam and Skolem Paradox", in *Reading Putnam*, Clark & Hale (eds.), Blackwell.
- Hansen, C 1987 "Putnam's Indeterminacy Argument: The Skolemization of Absolutely Everything", *Philosophical Studies*, 51.
- Koethe, J 1979 "Putnam's Argument Against Realism", *Philosophical Review*, 88.
- Lewis, D 1984 "Putnam's Paradox", *Australasian Journal of Philosophy*, 62.
- McIntyre, J 1984 "Putnam's Brains", *Analysis*, 44.
- Merrill, G, H 1980 "The Model-theoretic Argument Against Realism", *Philosophy of Science*, 47.
- Pearce & Rantala 1982 "Realism and Formal Semantics", *Synthese*, 52.
- Putnam, H 1978 "Realism and Reason", in his *Meaning and Moral Sciences*, Routledge & Kegan Paul.
- Putnam, H 1980 "Models and Reality", in his *Realism and Reason: Philosophical Papers 3*, Cambridge University Press.
- Putnam, H 1981 *Reason, Truth and History*, Cambridge University Press.
- Tymoczko, T 1989 "In Defense of Putnam's Brains", *Philosophical Studies*, 57.
- Wright, C 1994 "On Putnam's Proof that We Are Not Brains in a Vat", in *Reading Putnam*, Clark & Hale (eds.), Blackwell.